

国宝石山寺多宝塔内部柱彩色保存処置

受託研究報告第 25 号

茂 木 曙・立 田 三 朗

1. はじめに

石山寺は琵琶湖の南端瀬田川の畔にあり、境内に建久年間頼朝が寄進したと伝えられる多宝塔が建っていて、国宝に指定されている。内部の彩色は四天柱に菩薩、明王等の諸尊や小組格天井及び支輪等の一部に創建当初のものと思われる彩色が残っている。おそらく、当初には中央本尊後壁の表裏や外陣四方の板壁、扉、隅柱等にも極彩色が描かれていたものと思われるが現在は残っていない。

最近柱の彩色の剝離剝落が目立ち、これの剝落どめを昭和 44 年度の受託研究として修理技術研究室（立田三朗室長，中里寿克技官，茂木曙技官）と化学研究室（岩崎友吉室長，樋口清治技官）が行なった。実施に際し彩色についての保存処置前歴をしらべたところ、昭和 7 年～8 年に亘って行なわれた解体修理報告書に、「内部の彩色は著しく剝落しているが残っている部分も既に固着力を失い、粉状又は細片状となり、漸次剝脱しつつあって、工事の施行にも危惧を感じたので、其の全面に極めて稀薄な晒膠液を噴霧器を以て吹付け、尚細片状を為して剝離しつつある部分には細筆を以て裏面に同液を注入し、云々」とある。現在、支輪及格間の一劃に文様の彩色復原された部分が認められ、早や木地から大きく剝離し始めているが、復原彩色もこの工期中に行なわれたものである。更に昭和 32 年に、宮本一夫氏が彩色全体に剝落どめを、寺費で行なっている。この処置についての報告書は出されていないが、P. V. A 2%～4% の溶液を含浸させ最後に溶剤性のアクリル樹脂液を噴霧したと言うことであった。



図-1 多宝塔全姿

2. 処置前の柱の状態

法量、柱全高 228 cm 内底部の蓮座高 8.5 cm、柱直径約 30 cm、彩画の内諸尊像部分の四

区劃に別けられた内の一区の巾約 31.5 cm, 円の直径 22.5 cm。柱の天地及び仏面の区劃になっている宝相華帯文の巾約 13 cm。金具跡と思われる帯状の巾約 3 cm。

柱は四本共下半分は殆んどが剥落して、木肌が露出している。その木地のところどころに地粉下地のザラついた層や布着せの残欠が残っており、上半分の残存彩色の観察からも、一木造りの柱全体に亘って丹念に木屎づめと布着せと、かなり厚手の地粉下地を施してから白線を施し、彩色したものであることがわかる(図-2)。麻布はやや目が粗く感じられ 1cm^2 に 10~15 本程度の織目が数えられた。

残存部分の布地は素地によく接着しており剥離が殆んど見られない。彩色顔料層に無数に見られる剥離剥落は、布着せの上に層をなす地粉下地からのものが殆んどであった。顔料そのものの白緑下地からの浮上りが少ないことは(図-3)、前に実施された剥落どめで、滲透した合成樹脂が、厚い地粉層のために裏の麻布まで到達出来ずに、顔料及び地粉層の上層だけを固めたに過ぎず、麻布との接着力が出なかったものと推察した。彩色の残存部の周縁は、開口部から直接地粉下地層の裏側へ十分に樹脂を注入出

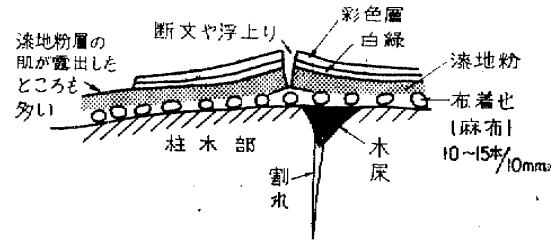


図-2 剥離・剥落断面図



図-4 剥離の一例
東北柱 西側



図-4 剥離及原因不明の細かい凸起の集団
東北柱 南側

来た結果と思われ、かなりよく接着している。縁から離れた位置で亀裂も見当たらない部分が袋状に浮上っている処は非常に多い。これは前回の処置で浮上り部分に直接合成樹脂を注入出来ず、また上から含浸させた分も内部まで滲透しなかったためである。又地粉に生じた断文がそっくり剝離しているものもあった。虫害は柱四本共かなりの虫穴が認められたが、柱上部に集中している。但し古いもので虫屎はなく現在進行中ではない。又東北隅の柱上部の南側に特に集中して見られるが径 0.5 mm~2 mm 高さ 0.5 mm~1 mm 程度の凸起が無数にあり、顔料がふくれているが、白緑下地の部分からの持上りのようで、いつ頃、どのような原因で起きたものか、皆目見当がつかない。これは、凸起が、そのまますぐに剝離、剝落に進むようなものではなく全く特殊なケースと言わなくてはならない(図-4)。

3. 保 存 処 置

調査前には、非常に複雑な剝離剝落と思われたが、柱全面に亘る布着せの麻布は木の素地によく固定しており処置の必要が殆んどなく、その上にある地粉層の浮上りをどう処置するかが、主題となった。幸いに以前行なわれた保存処置で、顔料は白緑下地に、白緑下地は地粉下地に割に良く接着し、地粉層そのものも、多少柔軟性を帯び、今回の処置にはプラスした。しかし、マイナス面は、前に吸っている晒膠液や、合成樹脂のために、新たに滲透させようとする樹脂が、何れを使用しても殆んど滲み込まないと言うことである。実際に剝離部分の一部に各種の合成樹脂を含滲させようと試みたがすぐに表面にたまり滲透しなかった。地粉層の下に注射針を差し込んだり面相筆などで、直接注入して圧着させると、P.V.A の3%~6%でよく接着した。但し3%では割合に広がり良く細部にまで滲透してくれるが、多少地粉層のそり返えり強い箇所では、乾燥後再び浮上るところもあったので、6%液を使用して丹念に処置をした。前述の一部袋状に浮いている箇所亀裂も開口部も、断文もなくそのまま安定している場合は、これに樹脂を無理に注入することによって彩色に傷を生じるおそれがあるので止むを得ず、そのままとした。原因不明の彩色上の凸起もそれに準じた。

Résumé

Akira MOGI and Saburō TATSUTA: Preservative Treatment on the Painting on the Pillars Inside the Tahōtō Pagoda of Ishiyama-dera Temple

This Tahōtō Pagoda at the Ishiyama-dera Temple in ōts-shi, Shiga-ken dates from the 12th century and is registered by the Japanese Government as a National Treasure. It has retained part of the original color painting decorating its interior. The surviving parts are Buddhist figures and floral patterns on the surface of the four interior pillars, on their upper halves. As far as known to us, preservative treatments on the paintings of the four pillars were done two times during the past 40 years. Recently the exfoliation and floating of the coloring have again become notable, so that we made treatment to prevent them.

Exfoliation seen this time had been caused mainly by coming off of the coloring from the hemp cloth covering the entire surface of the pillars, and from the considerably thick coat of a mixture of raw lacquer and pulverized claystone applied

over the cloth. For preservative treatment we used 3%~6% solution of P. V. A., which we injected or infiltrated by all possible means into the underside of the lacquer-claystone coat through openings, cracks in the pigments and interstices, subsequently pressing the treated surface down to secure in place.